

特集・どう創る研究の位置

有馬朗人が語る これからの日本の大学

教育・研究・教師像

聞き手 田子 健

編集委員

今、大学について考える際
最も大切なこと

——東京大学総長ご在任中に東大改革を軌道に乗せ、同時に、大学改革全体へのご発言を積極的になさっておられる先生から、これからの大学における教育と研究とそれを担う教師像について、お話を伺えることを楽しみに参りました。早速ですが、今、大学について考える際、最も大切なことは何であるとお考えでしょうか。

有馬 この頃、私は二ついつております。

一つは、国公私立を通じて日本の大学の水準は、新聞記

者の皆さんがいうほど、水準の低いものではない。ですから、そんなに文句をいうならアメリカ、ヨーロッパの大学を調べていらつしやいと。普通の人が外国に行つて見るのは、超一流の大学、例えば、ハーバードとかプリンストン、あるいは、オックスフォードとかケンブリッジとかMITとか、そういう所を見て、ノーベル賞受賞者や超一流の国際的な学者がたくさん出ているという。そういう大学だけではなくコミュニケーションや州立大学などいろいろ見て、日本の大学の教員の質が悪いかどうか判断して欲しい。私は、悪くないと思うし、学生も向上心はある。そういう意味で、世間の人々皆に日本の大学についての認識



ありま・あきと・1930年大阪生まれ。81年から82年日本物理学会会長。89年から93年まで東京大学総長、その間国大協会長・現在法政大学工学部教授・文部省学術顧問。

を改めて欲しいと思うのです。

また、しばしば研究の向上のために、センター・オブ・エクセレンスの構築をしなければならないといわれています。しかし既にいくつかの大学あるいは研究所では、センター・オブ・エクセレンスになっているのですから、更に、今ある大学がそういう方向で伸びるような十分な財政的裏付けをすべきですし、一方で人材の方も伸ばすべきです。

もうひとつは、センター・オブ・エクセレンスになっていくにしても、それぞれのプロジェクトが、十年なら十年経ったときには見直さなければならぬと思うのです。こ

れは、学部だって同じです。学部だって、あるプロジェクトを学部のなかに置いて十年間特別に育てたなら、あるところで見直してこれはさらに続ける必要があるとか、思い切って切るとかをしなければならぬ。一方で十分な予算措置をしてください、人の措置もしてくださいというのなら、自分たちとしてそれに対して十分な成果が上げられたかという厳しい反省をしなければならぬということです。また、研究のアクティビティーが十分保たれているかどうかを十年ごとにチェックすると同じように、大学教育に関してもやらなければならぬと思っています。これは、大学人が自らの力でやるべきことであって、私がこの一、二年東大あるいは国大協で主張していたのは、「大学よ、もう一度研究ということと同時に、教育ということを見直そうではないか」ということでした。大学の教員は研究に関しては情熱を持ち、研究というとは非常に喜ぶのですが、一方、教育については二の次という感じがします。なぜ大学院改革が流行語になって、皆さんが喜んでいるかというところ、それは、研究環境を良くするために役立ちますし、研究中心ということが非常にはつきり出るからです。しかし、同時に私は、大学の大きな使命とは教育だと思うのです。特に、学部では、根本的に教育の充実を図らなければ

ならない使命があると思うのです。そういう意味で、われわれ大学人が、教育に関して情熱を持っているかという疑問があるのです。そこで、東大でも例えば、スチューデント・エバリュエーションや、TAFつまりティーチング・アシスタントシップを導入しようとか、あるいは、シラバスといわないまでも、日本流でいいから授業内容をきちんとしようとか、お互いに講義内容を相談して関連させようとか、そうしたことをいつてきたわけです。

今日までに、多くの大学ができました。作るときは非常に真剣に議論しますが、一旦できてしまうとなかなかチェックしない。これはおかしいのであって、文部省がやるかどうかこの国の機関がやるというのではなくて、各大学自分でやるか、あるいは、例えば、大学基準協会のような大学連合でチェックすべきであって、国公私立を通じて同僚による評価、ある基準に関してのレビューをすべきだと思うのです。

以上のような二つの内容を最近いつております。なぜなら、私は、国公私立大学すなわち高等教育に関する国の負担を二倍にしてほしいと長い間いつてきたし、国民総所得に対して、アメリカが一・九%、日本が〇・九%であるから、もっと日本も高等教育にお金を投入すべきだと随分主

張してきました。一方で、大学はそうした国の援助に対して、きちんとした対応をすべく努力をしているのかどうかと考えたわけです。単に研究のみならず、教育の上でやってきているかという事を心配しているのです。

大学よ、教育ということを見直そうではないか

——研究のお話は後程伺うことにして、「大学よ、教育ということを見直そうではないか」とのご指摘、同感なのですが、目下大きな議論が始まったところでもあり、一方で戦前の帝国大学そのままのイメージが残っており、それに高校とほとんど同様の教育をするのか、というイメージもあります。先生のご経験も交えて、いわば大学教育の理想像をお話いただけると有り難いのですが。

有馬 旧制大学は学生がエリートでしたし、先生もエリートが聴いているといった意識を持って授業をやっていましたね。だから、授業にろくに出てこなかったり、出てきてもまともな授業をしない先生がいると、学生の方がダメだという評価を下してしまいます。また、その先生の授業が選択だったりするともう出てこないわけです。しかし、だからこそ先生の方も、意識的に講義の内容を高めています

た。とはいえ、講義に工夫というのはしなかったようです。こういう風に教えなければ、学生が理解できないだろうなどとはおおよそ考えず、学生が理解しようと理解すまいと、自分の持つている学問に対する美的水準を保つための努力はしていました。極端にいえば、多くの場合その講義の内容はそのままだになりましたね。たとえば、和辻哲郎先生の『風土』などは、今読んでいても実にいい本だと思うのですが、あれは講義なんです。それは、毎年手を入れられたかと思いますが、あの当時の学生がよくこれだけ理解したなと思うような程度ですね。

確かに、当時の学生はエリートでしたが、問題点はここから始まるのです。戦前の数%、戦後でもせいぜい十%レベルの学生に対しての教育と、今のような二十五%に対する教育は、自ずから違ってきました。戦前の先生の方が、講義熱心であったとか、講義がよかったとかいうことはないと思います。それでも、数として圧倒的に少なかった戦前の教師の方が、偉かったとは思いません。物理学の場合、七帝大にそれぞれ五人の教授がいたとして、全国では三十五人、せいぜい五十人の教授、助教が物理学を教えていたにすぎないのです。それに、高等学校ではナンバースクール八校とその他の高校が、今でいう教養部を担当していた

のですし、それもまたエリートだったのです。ですから、授業に学生が出てこなくても、エリートだから構わないのです。そういった時代の学生たちの反応や教師たちの講義の仕方は、今とはまるで違いました。そういう認識が、われわれ大学人にも、また、一般人にも伝わってきました。今でも、旧制高校を復活せよというような話が出ます。結局、産業界や教育界にしても、有力者は皆旧制高校の、あるいは戦後初期の大学の認識を持っていて、それをエリート教育で育った人たちが郷愁の念を持って懐かしがるわけです。しかし、学生を当時のように十八歳人口の十%にしようなどといえば、たちまち大騒ぎになるでしょう。現代は、大学が大衆化をしていく時代です。日本の国力をここまでもつてきたのは、高等教育がいい意味で大衆化されたからなのです。そういう時代にふさわしい教育を、われわれ大学人はしなければいけない。しかし、戦前の大衆教育のイメージがまだ残っている今、それを切り替えていく時に、どのあたりに視点を設定すると教育がうまくできるのだろうか、難しい問題ですね。

私は、東大、法政大を通じて、自然科学系の学部教育で欠けていると思ったのは、学生と教官との接触の場が少なすぎたということです。法政に行って、三年生十人のクラ



スを持って、一週間に一回は一時間半かけて話をしますが、そのクラスはうまく使えば育つと思う。そういう意味でお勧めしたいことは、極端に言えば、講義数を半分にするということ、そして、空いた半分の先生は、十人くらいのクラスを持って好きなことをしなさいということ。ただ、好きなこととは、高度な難しいことを好きに教えることではなく、その専門分野の学部教育を受けたからには、当然知っていなければいけない常識的で基本的なパターンを学生諸君が身につけられるようにして下さいということなのです。

今私がやっている例をあげれば、一冊の本を読んで、その中で使っている数学があれば、その数学の基礎がほんとうにわかっているかどうかを、根掘り葉掘り聞いていくわ

けです。それから公式が必要なら、次までに覚えておけよとか。学生は、当然知っておくべきことを知らないの、何を知らないのかということ、十人の学生を通じて聞き正しているのです。その上で、覚えておくべき項目のメニューを作ろうと同僚にもいつているのです。それだけは、徹底的にドリルを使って教え込む。それ以外で、単なる教養として一回聴いておいて、将来必要があれば本を見るなり誰かに聞きに行くなりできるものは、現在の教え方でいい。けれども、若いうちに徹底的に型を覚えておくべきことはありますからね。外国語教育でも、せめて一カ国語だけは身につけておけとか。歴史でも、これだけは覚えておきなさいというものがあって、それを、繰り返し少人数クラスを通じて教えることがいいのではないかと、今思っています。

さきほど日本の大学の先生の質がいいといったのは、研究熱心で研究者であることを望んでいると同時に、教育をきちんとやろうという意欲は確かにあるからです。自分の分野はこれだけだということ、その分野に関しては、休まずきちんと教えている。そうした努力は皆さん熱心にやっておられて、立派なものだと思う。ただ、あまり熱心すぎて自分は絶対これを教えるのだ、ということが多すぎや

しないか。むしろ、思い切って二年に一度の講義を作つて、裏の年は少人数クラスの指導にまわりドリルをしぼしぼしてはどうか。要するに理科系、文科系を問わず、何を身につければよいかという基本的なところを選びだし、それについては反復講義、反復演習をしてやるといったことが必要です。そして、学生にとつては、少しづつ自分の力が上がつていくのが見えるような工夫をしてやらなければならぬと思います。

小・中学校、高等学校を通じて教えることが多いにもかかわらず、工学部の電気・電子をやるのに、化学を勉強していない学生が多いといった問題が出てくるのです。一方で多様化をしていこうという傾向もあつて、なるべくいろいろなことを教えることが必要な時代でもあるが、もう少し整理をして、教育の中で教養に類するものと、本質的に基本となるものに分けていなければならぬのです。特に、大学の教養教育の中の一般教育では、教養(学)部的な認識の教養というものと、基礎というものが常に曖昧になっていますから、これを分けなければいけないと思うのです。それから、世の中がだいぶ変わりました。極端にいえば、三十年前は、大学は入学試験だけでやつて、あとは産業界に任せてくれれば教育はこちらでやります、という時代。

二十年くらい前には、専門教育はきちんとやつてください。十年くらい前には、専門教育だけでは足りないもので、自然科学系ではマスターくらい取つてきてください、と専門の上にある程度研究ができるような人が要求される時代になつてきた。最近では、また変わつてきて、一般教育あるいは一般教養を身につけて、国際的な社会で活躍できる人材を育ててほしいといつてゐるのです。だから、逆に産業界、あるいは、政府等の人々の意識のなかには、国際化に対応した教育ということが問題になつてゐる。その時に大学では、大学審議会にしてもわれわれにしても、一般教育と専門教育との関係について非常に心配して、一般教育をむしろ減らして専門教育を下に降ろしてゐることに一所懸命になつてゐます。なんとなく一般教育がいなくなつたと考へる向きもあるが、それは誤りで、むしろ社会は、もう少し一般教育をよくやつて欲しいという意向が強くなつてゐるのです。

これからの大学における 研究の位置について

——次に、研究の方に話を移させていただきます。私たちは、研究だけやつていこうという姿勢ではないの

ですが、大学の姿が変わるとすれば、これからの大学のなかでの研究の位置はどのようなものを考えればよいのでしょうか。

有馬

研究と教育との時間配分の問題でいえば、個々人の問題ではありますが、教育に九〇％時間を費やして一〇％で研究するか、逆に、研究を九〇％して教育を一〇％するとかいろいろ考え方はあると思う。しかし、私の考えでは、最低五〇％は教育に使ってほしい。後の五〇％をさらに教育の方にいくらか回すか、研究だけに使うかはいいでしょうが、研究だけでいきたかったらどこか研究所の間人間になりなさい。そういう意味で、逆に研究所は研究に専念しなさいといいたい。この頃盛んに、研究所が教育に手を出す傾向があるのですが。

ただ、大学のなかの研究所はなんといっても学部に近いから、併任等を通じて教育に参加するのは結構でしょう。

しかし、大学のなかでも研究所の人と話をしていると、教育などしたくないんです、研究をしたいんです、といわれる人もいるから、それはそれでいいと思うのです。ただ、学部にいる教員は学部にいる以上教育五〇％、研究五〇％くらいのつもりでやらなくてはいけないでしょう。それから、研究そのものも厳しくて、研究をやる以上研究者とし

ての評価を受けられるように努力をする。だからといって、皆がノーベル賞を貰うような仕事だけをねらうというのはなく、研究者として自分で満足できるような努力をされたいでしょう。

それから、高等学校の先生と、大学の先生との違いの本質は、こういうことだと思えます。現在は、大学の教員が研究者として五〇％に近い時間を費やして第一線の研究を続けている合間に教育をするのが、昔のフンボルト流の理念だとすれば、現在は高等学校の先生により近くなっていると思うのです。大学の教員に対してもっと教育に重点を置きなさい、高等教育が大衆化された以上、相当教育を意識してやりなさいといえるが、高等学校との違いは、現在研究を第一線でやっていけばなおのこと、やってなくとも、ある時期に研究というのはこういうものであるということをも身につけた人が教育をすることです。一方、高等学校の先生はあくまでも教育そのものを使命として、喜びとしてやっている人々。それに対して、大学の教員は、少なくとも一時でも、研究ということがどういう意味をもち、研究とはどういう風にやることか、研究というのはこういう面白味を持っているのだということを、一生のうち少なくとも一回は体験した人が教育をすることと違う。

だからその喜びを持続して持ち続けられれば理想的です。

私の大学教師の理想像は、かたや研究の上でいい仕事を続々と出す、かたや教育の上でもいい学生を育てていくということです。この二本が両立していたら望ましいと言えます。しかし、すべての大学者、すべての研究者、教育者にその両輪をどちらもすばらしくしろといってもできないですね。ですから、それぞれの人の、それぞれの大学の色合でやればいいと思うが、私の理想像とするところは、教育と研究のどちらに対しても自分は全力を尽くしてきたといえるような人であります。ただ、その時間の割り振りはそれぞれの個性によって、若いうちは徹底的に研究だったが、ある年からは教育を徹底的にやる人がいてもいいしね。

——研究をまとめて学問と呼んだとしますと、日本の高等教育機関が教育を重視するような方向で行った場合に、高度な研究を行ない、またそのための研究者を養成する次のことを考えますと、先生のお考えでは、学問研究のために別の組織を作る必要があるのか、あるいは、今の大学で十分なのかということです。

有馬 今の大学で十分です。だから、私が、先にいったように、センター・オブ・エクセレンスを別に構築する必要はないのです。現在ある国公私立大学及び、文部省や科学

技術庁が持っている研究所などを大切に育てればいい。なんとなく日本は、スクラップ・アンド・ビルドが好きで、要するに、掘立て小屋のようなものをあちこち建てるのが好きだね。それは、いけませんね。建てた以上は大切にやっつて、だめだったら思い切つてつぶす覚悟はしなければいけない。RCAなどは、大変な研究所を持っていましたがつぶれてしまった。だから、その時代時代のチャンピオンだったからといって、永遠にチャンピオンであるわけではないのです。という風に、スクラップ・アンド・ビルドではなく、いい意味での新陳代謝はしていかなければならない。自らの力で、この研究は一応終わったから、こういう風に革新しようということはしていかななくてはいけないですね。ですから、今のご質問に対する答えは非常に簡単でして、現在あるすぐれた大学や研究所を大切にしない、そしてそれに十分な施設を作り、設備を与え、研究費を与え、人的な手当てをしてやれば、研究所として、センター・オブ・エクセレンスとしてやっつていきます。なんとなくセンター・オブ・エクセレンスというところ、どこかに大きく建てればそれが、センター・オブ・エクセレンスだというのは違いますね。ただ、今までのように、横に横に広がっていくというのではだめだから、どこかの大学で、どこかの学部で

集中的に人的な手当でもするとか、財政的当てでもするとか、大学が努力していかなくてはならない。

——ところで先生は、外国にもよく行かれていたようすが。

有馬　そうですね。東大の在任中に百回行こうと思つたのですが、総長になつたばっかりにととう失敗してしまひまして、九十五回で終つてしまひました。その間、長期に滞在したのがかなりありますから、合わせて七年くらい外国に行つていたと思います。最後は、退任直前のこの三月にイギリスに行つて、イギリスの教育委員会の方で行なつた「欧米社会における教育のあり方と将来像」というシンポジウムに、海部元文相や永井道雄氏らと行つてきました。

外国と言つても、主に総長になる前ですから、完全に物理学の研究や、自分自身の研究、教育やシンポジウム、国際会議で話すためでした。九十五回外国に出張した旅費はどこが出したかという、総長になつてからは日本が出してくれましたが、それまでの旅費は日本が出してくれたのはほとんどないんじゃないでしょうか。総長になるまでの七十数回は、大部分が外国の国際会議の主催者であつたり、大学であつたりしました。

私が心配していることは、私が総長になる前の一九五〇年から一九八〇年ごろは、アメリカやヨーロッパがまだ経済的に強くて、われわれ日本人の旅費などを随分サポートしてくれたのです。総長になるまで私は、八十回ほど外国に行つていますが、その内で日本から旅費をもらったのは二十回程度かそれ以下です。それまでは、アメリカやヨーロッパがわりに景気がよかつたのですが、ギリシャ、イタリア、アルゼンチン、ブラジルのような、言わば、今経済的に困つていような所からも随分お金をもらつてきたのです。当時はまだ、外国で勤めて講義をしたりすれば、外国から援助を受けて行く可能性があつたからよかつたのですが、ここ数年は、アメリカもヨーロッパ、特にドイツも経済的に悪くなり、日本人を雇う余裕がなくなつたのです。今から十年くらい前までは、結構アメリカやヨーロッパが援助してくれて、国際会議などと呼んでくれたのです。

Keynote Speakerという、必ず費用をくれたものです。滞在費もすべて外国から貰いました。今、そういう余裕が外国になくなつたとすると、日本人は日本のお金で外国に行かなければならない。にもかかわらず、日本の若手研究者を外国へ出す費用は、依然として潤沢ではない。学術振興会などの努力のおかげで多少よくなつたが、学術振興会



自体の予算が九十億円という状況ですから、これで、日本へ招聘するのも賄い、外国へ派遣するのも賄うことは無理なのです。だから、文部省関係の、大学関係の若手の教員や、研究者を外国に送る費用はまだ不十分なのです。

——そうしますと、八〇年代の、外国から旅費などを援助してもらえような構造のままで、九〇年代も来てしまっているということですね。

有馬 そうです。外国の方が経済的に苦しくなるから、こちらから送らざるを得ない。東大総長をやっている時も、教官の外国出張については非常に心配していました。出張命令の判を押すとかかなりの部分が私費旅行のようでした。東大の場合、比較的奨学寄付金が多いので、それで行く人が多かったけれど、半分以上私費旅行でした。だいたい、国際会議に出るのに私費で行くのはおかしい。そういう意

味では、国際交流における予算を増やしていく努力をしていかなければいけない。私学に行っても痛烈に感じますが、ただ法政では、一年に一回外国出張をするために三十万円出してくれます。それ以外に特別に外国から、例えば、Keynote Speakerのように招待される時は、もう少し考えると行ってくれます。それでも、若手教官からシニアまですべてに行き渡ることはあり得ないし、年間三十万円で一、二カ月むこうできちんと勉強することは不可能です。どんな安いので行っただって二十五万円ほどかかってしまいますし、ですから、どうしても自腹を切って行かざるを得ない。私学も国立も通じて、外国との国際交流の上で外国人を呼ぶこともさることながら、国内の研究者が外国へ行くチャンスをもっと援助しなければならぬと思います。

**これからの大学教師の
予想される姿とは**

——さて、研究者から大学の教師になった現在の我々にとって、これからの教育と研究の担い手となるには、条件の整備も欠かすことができませんが、また主体的な力量の形成も重要だと思います。先程、先生の理想の大学教師像をお伺いしました。そこで、これからの大学教師の予想される

姿をお話いただけませんか。

有馬 この三月の末、私が東京大学を退任する直前に、ハーバード大学の総長さん、ルーデンシュタインさんですが、遊びにこられ、文部省の遠山高等教育局長が準備してくださって、京都の井村学長、慶応の石川塾長、小山早稲田大総長とかで話をしました。その時私が、大学の教育問題についておもしろいと思ったことは、ハーバード大学は、研究を目的とする大学として出発した大学ではなく、依然として教育中心の大学です、といわれたことです。

要するに、今は、ハーバード大学は大学院中心の大学ですが、大学院を中心とすることが理念ではない。学部が教育が理念である、ということが一つ。もう一つ、感銘を受けたのは、大学教師になりたての先生たちには教育センターがあつて、そこで教育の仕方などを教えます、ということ。アメリカの大学というのは残酷だと思ふけれど、一方で教育者としての訓練をしながら、一方で研究が良くなくてプロモートしないというアメとムチの大学だと思ひましたね。

しかし、ここであるほどと思つたことは、やはり、アメリカといえども新しく大学の先生になった人は、どういふ風に講義をすればいいのかという訓練はしてないのだから、

そういう人に講義はこういう風にするのだということを教えてやる。その精神はいいことだと思ひます。私は、そういう意味では、それぞれの教員が研究をしたいという気持ちを持っていることはいいと思うのだけれど、教育で職を得る以上、やはり教育の方で工夫をしなければならぬと思ひます。それは、そんなに難しいことではないと思ひます。学生に対して愛情を持つということ、学生をかわいがるという気持ちを持つこと、もう一つは、非常に初等的なことですが、黒板の書き方の工夫、声の大きさの工夫、学生の注意を喚起する工夫とか、自分なりに工夫してやるべきだと思ひます。

これは、自己反省の意味で申し上げるのですが、私は、三十年東大の講義とか、三年近くアメリカのニューヨーク州立大学のストーニングルックなどで講義をしてきましたが、それぞれの講義において残念だつたと思ふのは、特に日本の大学での教育で残念だつたのは、学生がどのくらい理解したかをきちんと見なかつたことです。

その点、アメリカの場合には、TA制度があつて、大学院の学生がなつていましたから、週あたり数問宿題を出して、必ずそのTAが採点をするのです。そして、あなたの講義のこのへんは良くわかつていて、このへんはあまりわ

かつていない、と言うことを報告してくれます。さらによかったことは、学生数が二十五人から三十人くらいであったこと、教科書がきちんとあったことです。そうするためには、百人くらいのクラスを三つくらいに割ってしまうのです。そして、三人の先生が同じ教科書を使って、常にお互いに相談しあいながら講義を進めていくわけです。もちろん、少数の所は、一人の先生が一人のクラス五十人のところもあるでしょうが、自然科学だったせいもあるけれど、大体は一人クラス三十人くらいでしたね。常にT Aが学生にドリルをやってくれて、そして、学生も講義を理解しいろいろな演習問題を解ける、解けないという訓練をしてきているわけです。そういう風に、問題を与えてやらせて訓練しているにも関わらず間違えてくる学生には、ちゃんとT Aが直してやり、そのことをいちいち私の所に報告してくれるのです。ですから、アメリカでは教育をする方の人間が常にレビューされている。そういう意味で、学生がどのくらい理解しているかを比較的よく理解していましたし、採点をするにしても、三十人くらいの採点は非常に楽です。そして、返しますと、それに対して学生が、これは合っていると思う、もっと成績は良いはずだけれどと文句を言ってくる。それには、Office Hour という制度があつて、毎

週決まった日の二時間ばかりはOffice Hour にしている。そのOffice Hour の間であれば、学生はいつ飛び込んでもいいわけですから、こちらはきちんと対応しなければならぬのです。

それに対して日本の場合、東大での講義はやりっぱなしでした。講義が終わると二、三十分を使って質問は随分受けましたが、そのクラス全体が自分の講義を理解しているかどうかは、チェックをしなかった。だから、私が自己反省をしているのは、もう少し細かく授業の後に理解しているかどうかを知り、わかっている所は補習してやるとかすればよかつたと思います。最近、国立大学ではT Aが導入されましたし、私立でもT Aをやっているところがあるようです。ですから、そういう点について、大学教員がきめ細かくやっていけば日本の講義も随分よくなると思います。

もう一つ私は、自分の一生を振り返つてみて、大失敗だと思つたことがあります。それは、教育研究プラス行政とすることを一緒にしてきた。だから、私は、自分自身が研究者に徹するのなら研究者に徹し、もちろん教育ということもやるけれど、行政ということはしない。逆に行政をするのなら、徹底的に研究は放棄して行政するくらいの覚悟

があつてよかつたと思うのです。ここに行政と研究、行政と教育というのが、車の三輪になるのです。大学審議会答申を読んでいると、教育、研究及び行政の上での評価をして人事をしないといふと書いてある。これに対して、私はいささか自己批判があつて、大学の先生は、特に東京や京都や大阪といった大きな都市の先生は、行政に関わりすぎるといふ点で忙しい。だから、思い切つて行政専門の大学教員を増やす一方、やらなくてすむ人はやらさない方がいいといふ気がする。

もう一つ、絡め手のお話をする、大学の教員の評価は決して甘いものではないといふことです。そんなに簡単に助手になり、助教授になり、教授になることはなくて、教授になるためには、助教授時代の業績をどの大学でもかなり厳しく見えています。あるいは、他の大学から輸入することもあるし、決して甘くないと思うのだけれど、ただ申し上げたかつたのは、その評価の際に研究といふことは、実によく評価されるのです。この人は、国際会議で話したことがあるとか、本を書いたことがあるとか。しかし、およそ教育とか行政といふことは評価されないので。だから、大学審議会答申の中に、大学の教官の人事においては、すべからず教育、研究、行政それぞれの上の業績の評価をせ

よというのだけれど、ほんとうに各大学でそれがやれるのでしようか。教授会に向かつて、「あなたがた、今後は諸君の後輩を呼ぼうと思うが、行政及び教育の評価をしない」といえるでしようか。できませんね。現にできない一番いい例は、世の中にいろいろな賞がたくさんあるが、どの賞にも大学行政をしつかりやつたから賞を出します、といふのはないですね。ですから、評価の中心は結局研究なんです。時代としては、プロモーションの際に、研究、教育、行政を考慮に入れなさいといふ時代が来ましたよ、皆さんはその時代に対処しなければいけませんよ、といつてゐる。しかし、一方、いろいろな賞は何で出しているかといふと、ほとんどが研究業績です。ですから、一方で教育をしないといふお勧めするが、一所懸命教育したことに対してだけのリワードがあるかといふと、ないですね。そこで、大学でもっと真剣に教育業績評価の方法を考えなくてはならない。

だから、一つは、行政にあまり忙しくならないようにすること、もつと大学の本来の教育と研究に時間を費やすようにしましよ、というのが私の提言です。では、誰も行政をやらなくてもいいかといふと誰かがやらなくてはいけない。しからば、その行政をやる人の、行政に対する貢献

というものを、きちんと客観的に評価しなければいけない。今は評価しませんね。あいつ忙しくしているけれど自業自得であるとか、やる方も仕方がない、選ばれてしまった以上といつてやっています。ですからわれわれが大学人が、大学の教員が本当に研究、教育に没頭できるような雰囲気を作るためにはどうしたらいいか。また、行政をやる人がいたら、行政に対しての業績をきちんと評価してやる。あるいは、教育を非常に熱心にやる人がいたら、客観的に評価していくような仕組みを作っていくことが、今後の大学の一つの仕事ではないかと思えます。

——最後に、日本の大学を、教育と研究の両面で発展させていくために、これからの大学人にこれは、というご提言がありましたら、お話しただきたいのですが。

有馬 まず、第一に、私が大学人に言いたいことは、自分の仲間の悪口を言いなさんなということです。要するに、新聞社とか、政府だとか、いろいろなところに出ていくわが大学人は、必ず自分の大学の悪口を言う、あるいは、自分の仲間の悪口を言うのです。これは、よしなさいと言いたい。もし、言いたいことがあったら、まず、自分の大学で自ら実行しなさい、ということ。そして、自らの大学なり、そこまでいかなくとも、自らの学部なり、自らの

学科内を良くすることが、一番重要なことです。その実践を通じて何か問題があれば、その問題を世に訴えて直せばいいでしょう。学校の教育が悪い、大学の教育が悪いと思つたら、自らは、せめて名教授になりなさい。もし、隣の先生が悪くてできないと思つたら、その隣の先生を口説いて良い教育をさせるよう努力しなさい。それを言わないで本を書いて、日本の大学の先生はなつてないとか、なんで大学なんかに行くのか等というのは大嫌いです。天に唾するという言葉があるが、自らに唾するのはおかしいですね。それよりは、地味でいいから自らの講義を良くすること、あるいは、研究のレベルを上げること。確かに、設備費が足りないとか、研究費が足りないとか、人件費が足りないとか、たくさん問題があるから、それは、その仲間の共通な問題として世に訴えましようということです。

二つ目は、不十分なところは明らかですから、その不十分なところをどう補つていくか。これは、国公立大学共通な問題で、最終的にはお金の問題になるかもしれないけれど、世間が大学人があれだけ努力をしているのだから、少し環境を良くしてあげようというような気持ちになるようにしてゆくべきです。そのためには自己点検をして、自分たちだけでなく社会に報告をし、何が欠点かということ

を明らかにし、どこが優れているかということ世に伝えるということが必要だと思います。

三つ目は、国際性ですね。特に、大学院を持った大学に対する要望ですが、人文系では、留学生等に早く博士号を出すということ而努力していただきたい。人文系、社会系は問題だと思う。大学の先生になる以上は、博士号を持っていてしかるべきだと思う。国際的な戦略からいっても、外国の大学では、文科系、自然科学系を問わず、皆博士号を持つています。だから、皆さんには、是非博士号を取ることをお勧めします。先ほどの研究者としての、という話があったけれど、私は、人文系、社会系に関しては、皆さん博士号をお取りなさい、博士号を取ることが、大学の教育、研究の出発点だと言いたいのです。教育研究の現場にいて十分やれるという保障、いわばライセンスのようなもの

のとして博士号が必要なので、それは是非お取りになり、かつ大学側も出すという努力をしていかなければいけない。特に、留学生に対してはね。大学に望むことはいろいろあるが、各教官、教員の人々の自分の意識を高めることではない。自信を持って進んで下さい。

——大変に示唆に富むお話に励まされました。お忙しいところ本当にありがとうございます。

(一九九三年六月十七日、文部省学術顧問室にて)

速記・亀谷幸美
構成・田子 健
写真・秋野勝紀